

「天然の水づくりの龍間ムラ」



「夏にかき氷が食べたい、どうしたらよいか」もし、明治初期だったら、この問いにどう答えるでしょうか。この答えを大東市龍間の水造りに求めてみましょう。

龍間は、八軒屋浜（現在の天満橋付近）から舟を使って住道までおよそ2時間さらに徒歩で2時間の大阪平野を見下ろす生駒山系に位置しています。

古くは717年〜724年の養老年間に「更浦水所」（現大東市・四條畷市域と推定）があったことが、平城宮跡から発掘された木簡から分かっています。その後、河内国讚良郡讚良の水室（ちよら）として、927年成立の「延喜式」や平安時代末の「朝野群載」（ちやうやくんざい）などにも記録が見られます。この水室でできた水は宮中に運ばれ、「削り水」として食され、あるいは遺体の保存のために使われました。

一方で、一般の人が夏場の水を口にするのは、明治になってからのことです。幕末期より、富士山腹や岩手県宮古から横浜へ、水の搬送が試みられましたが、搬送手段を確立できずに失敗

の連続でした。明治初年になり、ようやく函館五稜郭（りやうかく）の水を横浜へ運ぶことに成功し、全国的に水ビジネスが盛んになっていきます。

その中で関西では、先に述べた古代の水室が復活していました。その一つである龍間の製水権は、明治23年、「龍紋水室」という会社が掌握します。同社が大阪に機械製の工場をつくる明治40年代までが、龍間の天然水の黄金時代と言えるでしょう。

龍間は、標高が高いだけでなく、消費地までの距離の利点と輸送手段があればこそ、水造りに適していたのです。

龍間神社の境内に、「天然水記念」とある灯籠が奉納されています。昭和5年という奉納年は、水造りの終焉を物語っています。

（大東市立歴史民俗資料館）



天然水記念灯籠（龍間神社）